

学校教育課だより

かけはし

教師の〈適齢期〉

〜三尺下がって師の影を踏まず〜

教育長 勝又 将雄

◆ 後期の活動が始まり、「秋」らしい学校の姿があらわらこちらで見られます。

過日、福島県南相馬市で開催された「全国報徳サミット」に出席してきました。復旧されていない常磐線。福島駅から二時間の列車代行のバス移動。全村避難の飯館村。走る道路両側の家並には、人の気配がありません。除染作業中の作業員の姿だけがありません。絶句。それゆえにサミットで発表・公演した子どもたちの前向きな姿に感動。市町村交流会では「子どもは未来からの使者」の話も聞かされ

「報徳精神」の絆は大きなものがあると実感しました。そうした、明るい子ども

声に元気をもらう人がいる一方で、いろんな経緯もあつたのでしようが、都会では保育園建設問題で「子どもの声は騒音」とする切ない話題もありあります。改めて「教育とは未来を語ること」を思いま

◆ 九十二歳の「知の巨人」と称される外山滋比古さん。その著書『本物のおとな論』（海流社）には、外山さんのユニークな発想が「知性」あふれています。

学校教育課だより
「かけはし」
【第 6 号】
平成 28 年
10 月 26 日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

外山さんは、三尺下がって師の影を踏まずの「三尺」を、年齢に換算したら、どのくらいになるか考えます。そして、教師と生徒の年齢は、二十年くらいはなれているのがよい。それより小さいと、うまい関係になりにくい。かといって、はなれすぎてもよろしくない。四十年くらいがよい。それを超すと、教師の力は及ばなくなる。…そんな仮説を立てました。

つまり、先生は敬わなくてはいけない。近づきすぎては礼を失する。三尺はなれて、影も踏まないようにしなさい。と。師弟の間は、近くても、三尺のへだたりが必要である。近づきすぎではいけないと教えた。三尺下がってというのは、物理的距離であるが、心理的にもなれなれしくしてはいけない。はなれて敬意を示せ、と外山さんはいいます。

教師のいのちは、生徒(児童)の年齢より二十年上のときから力を持ち始め、四十年くらいになると、感化力を失う。生徒が十歳なら、教師の適齢期は三十から五十歳くらいまでとなる。これは、人間が子どもをもうける年代とほぼ合致する。生徒のことを教え(子)というのは偶然ではない。

ただ、教師は年少の生徒(児童)と触れていて、なかなか年をとりにくいから、年齢差四十年を超えても、若々しさを保つということは充分ありうる。

「老先生の教育力もばかにならない」というのが、外山さんの説。

それに近いことが、世代間についてもいえるように考えられる。

小人(子ども)と大人(おとな)は、二十年のへだたりがある。

二十(はたち)にならないで大人ぶることはできない。大人も年をとって、新しい世代を生むことのできない六十になると、そろそろ卒業で、「年寄り」となる。かつては勤め人が少なく、定年、退職とい

うことも少なくなかったから、大人は「年寄り」になるのがおくれたが、今はそうはいかない。
大人の「年ごろ」を引き上げる工夫が必要だ。

外山さんのお話に納得。読書の秋でもあります。御一読をお勧めします。

◆ 管理主事の学校訪問がすべて終了しました。長谷川総括管理主事より「多忙化解消・不祥事根絶・健康管理」の大きな三つの柱で御指導をいただきました。教育委員会はもとより、学校、教職員の一取組に「意識」した改善の方策を加えていく必要を自覚します。

管理主事に帯同して市内の全教室を参観させてもらいましたが、子どもたちの落ち着いた、表情豊かな教室風景が心に残ります。先生方の前期教育活動、地道な教育の成果と受け止めています。同時に教師には、落ち着いている子どもたちだからこそ、教室、学校における「授業力」「教師力」が問われてきます。
学校は「組織」で動きます。教育は「人」で成り立ちます。

前教育委員退任の挨拶

岩瀬 一 予 様

どこにでもいるただの主婦である私が、教育委員を拝命いたしましたからあつという間に四年の歳月が過ぎ、この九月をもちまして任期満了となりました。在任中は市職員の皆様、教職員の皆様、そして「縁がございました一緒に教育委員をさせていただいた皆様には、ひとかたならぬお世話になりましたことを、この場をお借りいたしましたして厚く御礼申し上げます。

拝命当時、中学一年生だった長男は高校二年生に、小学四年生だった長女は中学二年生になりました。現在でもそうですが、任期中も思春期真っただ中でしたので、本当にいろいろなことがありました。ですが間違ひなく言えることは、「先生は本当に大変」ということです。がんばっている御殿場市の先生方、ありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。

繰り返しになりますが、関係各位の皆様には大変お世話になりました。四年間本当にありがとうございました。

教育指導センター訪問記

先生の思いが伝わる授業

先生の思いが子どもに伝わっている授業は、子どもも頑張ることが出来ます。先生の思いが伝わっていると感じた授業をいくつか紹介します。

御殿場南小学校の六年生担任の山本彩加先生は、「課題は全員で解決する」という思いを子どもたちに伝え続ける。単元ごとの学習計画を子どもが理解し、自分たちの力でゴールに向かおうとする。先生は、子どものつぶやきをよく拾い、ノートもよく見ながら、子どもの思いを授業に活かそうとする。参観した国語の授業では、多くの子どもが発言したが、課題が解決できずに時間が来てしまった。子どもたちは「また、やりたい」と先生に訴えた。課題が、完全に子どもたち全員のものになっているのだ。

高根中学校の保健体育科の勝野由志雄先生の授業は、バレーボールのネット張り一つでも、きれいに張れるよう指導する。地域の球技大会などで、役に立つ仕事ができる人を目指す。参観の授業は、「ボ

ールに関われない生徒」の気持ちを高めるのが目標だ。そのため、ボールはやや柔らかいものを揃える。ゲームは「オールOKバレー」だ。ボールに何回触れても、床に落ちても、コートから出ても、どこまでも追いかけて続けるというルールだ。生徒は、失敗を恐れる必要もなく、我を忘れてボールを追いかける。生徒は、夢中でボールを追い、たくさんボールに触れた満足感を体一杯に表わしていた。

御殿場中学校の英語科の松原雄先生の授業は、生徒を英語好きにし、実戦的英語力をつけさせたいという思いが、先生の全身を通して生徒に発信される。明るく元気で、明快な言葉を発し、授業はスピーディーで、何度でも繰り返し。生徒は、躊躇する余裕もなく引き込まれていく。間違いを咎めることもなく、徹底して教える。英語に関する豊富な話題も生徒は興味を持つ。参観した授業では、先生方へのインタビュ内容を考えさせられた。実践に向けて、生徒は真剣に考える。英語の時間は、いつもあつという間に時間が過ぎていく。

教師力向上講座「架け橋」

本講座は、本市の若手教員や講師の教師力向上を目指した研修です。本年度で四回目の取組となります。

第一回のテーマは、「子どもをみとるとは」で、幼稚園指導員の勝又立雄先生御自身の教員時代のエピソードを交えた講義でした。以下、参加者の感想をいくつか紹介します。

- ・ 去年一年間感じた悩みや不安の多くを改めて感じさせられました。ヒューマンエラーと悪意の判別を自分の中でできていないことを痛感し、改めてたいと思いました。
- ・ 「やってみる」「かつこつけない」という話が印象的でした。失敗を恐れず取り組んでいきたいです。笑いが絶えないために講義でした。
- ・ 自分の日々の姿を見直すよい機会となりました。「ほめる」「しかる」の二つを特に大切にしたいと思います。

第二回のテーマは「単元を構想するには」指導案の書き方」で、静東教育事務所の水達夫指導主事の講義・演習でした。以下、参加者の感想をいくつか紹介します。

- ・ 子どもに主体的に学んでほ

しくてたくさん喋ってしまいう時があつたなど振り返る時間でした。教材研究を大切に、単元の見通しを持ちたいです。

- ・ 「考えよう」「書こう」などの言葉を無意識にいつも使ってしまったことに気付きました。苦手な子どもにも光を当てて、どのような発問をしたら考えやすいのかを考えながら、授業をすすめてたいです。
- ・ 演習でやったように、指導案を作るときに暖色(子ども)の思い・表れと寒色(教師)の思い・指導内容に色分けして、子どもが主語になるように考えたいです。

参加者の中には中堅の先生方もいます。時間外の希望研修にもかかわらず、前向きな姿勢に頼もしさを感じます。

【指導主事 秋岡智子】

